

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 21 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20402040

研究課題名（和文）ブラジル日系コロニアにおける再生産構造をめぐる現地調査

研究課題名（英文）Social Analysis on the structure of reproduction in Japanese Colonia, Brazil

研究代表者

紀 葉子（KINO YOKO）

東洋大学・社会学部・教授

研究者番号：40246781

研究成果の概要（和文）：日系コロニアにおける文化的再生産構造について質問紙調査と聞き取り調査を通して明らかにすることを試みた。ブラジル社会において日系人は高等教育の機会を利用して、やせた大地に入植した貧しい農民から都市の中間層へと地位上昇を果たしてきた。こうした日系人の文化的再生産を、学歴資本、言語資本、およびパフォーマンスに象徴される身体的文化資本に着目して分析した。学歴資本に関しては、1 世代の徹底した教育機会の剥奪が明らかになるとともに、教育への憧憬がこども世代の大学進学の前動力であったことが明らかとなった。また、言語資本に関しては、継承言語としての日本語教育が送出国からの援助も乏しく斜陽化してゆく中、Cool Japan の国際的な展開として新たな日本語への関心が高まりつつあることが伺えた。新たな日本語への関心の高まりは文化的再生産とは直線的に結ばれるものではなく、新しい動きとして分析すべき対象であろう。また、身体的文化の再生産としては本土のそれと異なり、琉球の文化においては次世代の積極的な受容が認められた。

研究成果の概要（英文）：This survey tried to revealed the structure of cultural reproduction in Japanese Colonia, Brazil through interviews and questionnaires. In Brazilian society, Japanese Brazilian could take an advantage of the opportunity of higher education to be urban middle class. This study analyzed the cultural reproduction of the Nikkei by focusing educational capital, linguistic capital, physical capital for the Performing Arts.

For Educational capital, the deprivation of educational opportunities had been obvious among the first generations. Their Longing for education had been the power to their children to be learned in the higher educational institutions. For linguistic capital, whereas the traditional Japanese education tends to decline, a new interest in Japanese language is increasing as international expansion of Cool Japan. As the reproduction of physical culture, it is not easy to inheritance to the next generation (although some exceptions exist) in the mainland Japan, but in Okinawa the positive successors are observed. Represented by Cool Japan, new Japanese culture to be acquired through the manga and anime has generation gap significantly but Okinawan culture there is the continuity beyond the generations.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
総計	4,100,000	1,230,000	5,330,000

研究分野：社会科学 B

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：エスニック・アイデンティティ、文化的再生産、文化資本、社会分析、ブラジル
日系社会

1. 研究開始当初の背景

日本社会において「日系ブラジル人」というと「出稼ぎ」のイメージが強いが、ブラジル社会において「日系人」は数少ない中間層を形成するエスニックグループである。移住した際に豊かな地域に配耕されたものは極めて稀であったため貧困な生活を余儀なくされたものの、教育機会を得て地位上昇を果たした日系ブラジル人はブラジル社会で比較的豊かな暮らしを営んでいる。こうしたブラジル社会での地位上昇を「文化資本」の相続状況と関連づけて分析し、日本における日系コロニアの負のイメージの転換を図る必要があると考えるに至った。

また、2世、3世代の地位上昇に比例して日系コロニアへの帰属意識が薄れてゆきつつある現状を踏まえ、日系コロニアの歴史を、その未来への展望も含めて記録しておくことは日本社会のみならず、やがては広大なブラジルの大地に飲み込まれてゆく日系コロニアにとっても少なからぬ意味を持つと考えるものである。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は現代社会学を代表する社会学者のひとりであるピエール・ブルデュー (Bourdieu, P) の社会学的知見を背景に、日系コロニアにおける再生産構造を現地調査によって分析することである。移住する際に有していた日本文化に対する知識や日本語の能力等が次世代の教育にどのように活かされてきたのかをライフヒストリーの聞き取り調査を通して明らかにすることを主たる目的とした。こうした調査を通して親の世代から子へと相続される文化資本として、学歴資本、言語資本、および身体(的芸術)資本を加えて分析することを試みた。

3. 研究の方法

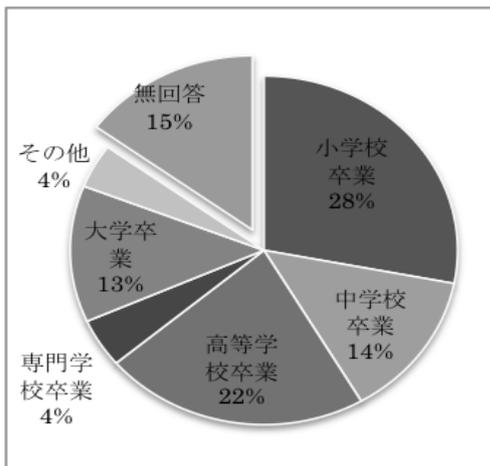
P.ブルデューがその研究の晩年に試みた複雑化する社会の中で見えにくくなっている他者の苦悩に対して「理解」の回路を開く「社会分析

(Socio-Analyse)」を現地調査に取り入れることで、日系コロニアへの共感的理解が可能となるような調査研究を心がけた。質問紙を用いた調査によって調査協力者についての基本的な属性等を把握した上でインタビュー調査に臨むとともに、調査者による調査協力者に対する「象徴的暴力」を調停し得るライフヒストリーの聞き取りを実施した。また、質問紙調査では「無回答」として統計処理の対象外におかれがちな回答を聞き取り調査によって掘り下げ、調査協力者の現実に迫ることを心がけた。

4. 研究成果

サンパウロ老人クラブ連合会の協力の下、調査紙を用いた日本語能力等を問う調査を2008年度に実施した。奇しくも2008年は笠戸丸移民から100年を迎える記念すべき年であったが、日本国内で日系コロニアへの関心が高まりを見せることは遂になかったとしても過言ではない。日本国内におけるこの冷淡さは、移民送出国としてのみならず出稼ぎ労働者受け入れ国としても情けないものとの感慨を強くした。日系コロニアにおいては大きな記念式典が催され、来るべき新たな世紀に向かう記念すべき年であった。

サンパウロ老人クラブ連合会が主催するいくつかのイベントの中でも特に人気の高い親睦カラオケ大会に集まった人々を対象に質問紙を配布して調査を実施したところ、日系コロニアの主たる構成員である一世ないし準一世世代の徹底した教育機会の剥奪が明らかになった。



小学校卒業の中には戦前の尋常小学校卒業も含まれており、今日で云うところの小学校卒業とは異なるが、傾向として高等教育を受ける機会を得たものは稀であり、義務教育課程で修了しているものが、過半数を超える。最終学歴に関しては無回答（未記入）が15%に上っているが、これは選択肢を「卒業」としていたため、小学校には入ったものの卒業することができなかった調査対象者も少なくないことが後の聞き取り調査で明らかになった。戦前であれ戦後であれ、こども移民として小学校課程の途中で太平洋を渡った人々の中には、奥地に配耕されたためそもそも通える範囲に小学校がなかったり、あったとしても「移民」ではなく「出稼ぎ」であるとの親の認識ゆえに学校に通わせられなかったりといった理由で、そもそも学校教育とは無縁であった人も少なくはなかった。移住してきた親自身が豊かな文化資本を有していたが故にこどもの教育機会を確保することに努め学歴による地位上昇を可能にせしめたというよりも、親の世代の徹底した教育機会の剥奪が教育への憧憬となり、こどもの教育機会を「創造」したとも云うべき実態が浮かび上がった。

調査協力者の85%がこどもを大学へと進学させているが、ブラジルの大学進学率が今日においてなお15%程度であることを想起すれば、文化資本の相続は乏しくともむしろその乏しさ故に教育機会を重視したことが伺える。こうした高進学率の背景にはブラジルの公立大学の学費が無償であることとも大きな要因であろうが、親の生活が豊かではなかったために、苦学して夜学で学んだ2世、3世も少なく

い。学歴資本に関しては、親の学歴資本を相続した結果ではなく、親の世代のあまりにも乏しい学歴資本が、こども世代の高学歴の取得につながったことが明らかとなった。

しかしながら、移住する前の日本での教育、あるいは先に入植した人々が開いた日本語学校での教育が彼らをしてこどもの教育へと向かわしめた可能性は否定できない。日系人の集住地域では日本語学校が創られ、日本語教育を通して「日本的なるもの」を継承してゆくことが試みられてきた。言語能力としての日本語のみならず、例えば、挨拶の仕方を通して日本的な学びの姿勢を身につけさせるような教育である。継承言語としての日本語教育は学校教育課程を剥奪された人々に時に学びへの餓えを抱かせ、次世代の学歴取得に貢献したと考えられるが、こうした継承言語としての日本語教育の場は、今日、縮小傾向にある。それと呼応するように日系人の進学率も際立って高いものとはいえず、ななりつつあるのだが、この相関関係を実証的な研究を通して明らかにしてゆくことがさらなる課題として明確になったことはひとつの成果であると云えよう。継承言語としての日本語教育は、その担い手が少なくなるとともに3世、4世による需要も乏しく、それに取って代わるように、新しい日本語教育が台頭しつつある。祖父母、両親から相続した日本文化ではなく、新しい日本文化との出会いが日本語への関心の扉となる傾向は、世界的に広がるCool Japanのムーブメントと重なっている。家庭内でもはや日本語を使用しない3世、4世世代のこどもたちが、日本製のマンガやアニメーションに触れることによって、日本語への関心を示す傾向をみせている。が、彼/彼女らが学ぶ日本語は、コロニアで学ばれていた日本語と必ずしも同じではない。国際交流基金関西国際センターが制作・運営している「アニメ・マンガの日本語」にみられるような日本語表現はコロニアの日本語教師の継承言語としての日本語とは似て非なるものである。こうしたコロニアにおける継承言語としての日本語教育の推移と、新たなる日本語教育の可能性をさらに現地調査で明らかにすることが必要であると考えられる。

学歴資本の再生産は認められないにせよ、他の文化資本においてはどうかであろうか。言語資本としての日本語

の再生産は、送出国である日本からの積極的な援助に極めて乏しく、継承言語としての日本語が曲がり角を迎えている点に示されているように、再生産されているとは言い難い。かろうじて再生産される文化として認められるのはパフォーマンスアートであり、日本舞踊や日本の歌謡は日本語以上に継承されている傾向性が強い。サンパウロ老人クラブ連合会主催の芸能祭ではコロニアの担い手による民謡や日舞が披露されるが、日本語を話すことが必ずしもできなくても、日舞の振りを習得することは可能である。が、こうしたパフォーマンスアートも2世代までは関心を示すものの、ブラジル文化の中で生まれ育った3世代に継承されるケースは極めて稀であり、おじいちゃんやおばあちゃんの発表会をみるために会場を訪れることはあっても、自ら踊り手や歌い手になることはまずない。一方、沖縄のパフォーマンスアートは現代のブラジルコロニアの若年層の関心も高く、日本語もうちなあぐち（沖縄言葉）も操れなくとも、三線を上手に弾きこなし、エイサーのリズムで踊れるものも少なくはない。沖縄「返還」から40年を経て琉球の文化も日本文化に包摂するのであれば、本土のそれと異なり沖縄系のコロニアにおいては身体的文化の再生産は極めて堅調であり、身体的文化を通してうちなあの心もまた継承されている様子が顕著である。

日本本土の文化の中でも、和太鼓や阿波踊りのようにリズムカルでブラジルの文化と親和性の高いものは若い世代の関心も高く、継承される傾向を有しているものの、一般的な日本文化は敬遠される傾向にある。それに対し、沖縄のパフォーマンスアートは送出国である沖縄本土との交流や移民先の他の国々のコロニアとの連携もあり、逞しく若い世代に継承されてゆく傾向が認められる。沖縄文化の特徴は、クールジャパンに象徴される新しい日本文化がコロニアの伝統的な日本文化の担い手たちとの断絶を内包しているのに対し、豊かな継続性を保持していることにある。こうした文化的再生産の可能性についてはさらに継続的な現地調査が必要でと考えるものである。

5. 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 紀葉子: “フィールドノート日系コロニアにおける二つの文化伝承～琉舞と煎茶～” 東洋大学大学院紀要、査読無し、第47集、247-256 (2011)
- ② 紀葉子: “サンパウロ日系コロニアにおける老人クラブ連合会の社会的機能～大都市における高齢者の社会生活を支えるネットワーク～” 福祉社会開発研究、査読無し、第3号、15-28 (2010)
- ③ 紀葉子: “サンパウロ、カロン地区における地域福祉活動の試み～日伯援護協会による奄美事業所跡地プロジェクトの現状と課題～” 福祉社会開発研究、査読無し、第2号、71-80 (2009)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

紀葉子 (KINO YOKO)
東洋大学・社会学部・教授
研究者番号: 40246781

(2) 研究分担者 (0)

(3) 連携研究者 (0)